



# 暮らしを彩る暦

## 暦の機能と文化

先日、人間文化研究機構の連携研究「文化の往還」の研究会で、モンゴル国のカレンダー文化の話を書く機会に恵まれた。モンゴルでは、古くから日月星辰の運行を計算した精緻な暦が作られ、日々の吉凶や運勢が占われてきた。

●方違えをするモンゴルの人たち  
研究会では、モンゴル暦研究の第一人者であるモンゴル国立大学元教授のテルビシ氏をお迎えし、モンゴル暦にはインド・チベット系の暦と中国系の暦の両方の系統があるところや、モンゴルの人びとの日常生活にモンゴル暦が深く根をおろしていることを興味深く拝聴した。

モンゴルでは、自分の生年に応じた毎日の運勢がとても大切で、新聞にもモンゴル暦にしたがった運勢が毎日掲載されるという。方角もまた重要で、ある場所に出かけるとき、方角がその日の自分にとって凶であれば、日本で言うところの方違えをおこなう。

●外出時刻と方角の吉凶を占う台湾  
こうした話を聞きながら、筆者の調査地である台湾でも日々の吉凶を気にする習慣が根強く残っていることを思いだした。

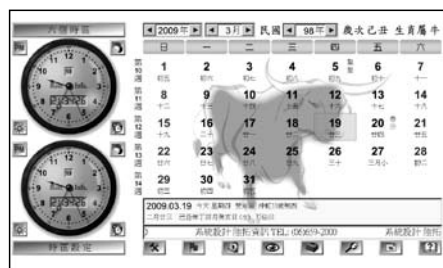
涙の文化というテーマで原稿の執筆を頼まれ、台湾の風景を涙という切口で描こうとし、思いついたものの一つが泣き女であった。朝鮮半島の習俗で「泣き女」という職業を聞いたことがある人は少なくないだろう。葬儀に参列して泣くことをなりわいにする女性である。じつは、この泣き女が派手に泣く光景は、朝鮮半島のみならず、中国や日本でもかつてしばしばみられた葬儀の一コマであった。

現在の台湾では、地方に行けば時折出くわすこともあるが、台北のような都市ではほとんど見かけることはないという。それでも、方に一つという思いで、台北の中心部にある総合葬儀場に出かけてみると、二十代の友人に相談したすると、「ちょっと待って」と携帯電話をとりだし、なにやら操作をはじめた。しばらくして、「今日も明日も、第一総台葬儀場の方角は大丈夫ですよ。でも、できれば午後のほうがいいです」。私の生年月日から、葬儀場に行く時刻や方角が適切か否かを調べてくれたのである。

●世俗的価値観を反映する  
聞くところによると、携帯電話

でこの種のサービスを使うのはそれほどめずらしいことではなく、方角や時間の吉凶は若い人もそれなりに気をつかうという。日本でも、結婚式に仏滅日を避けたり、友引の弔事は忌むというのはよくあることだが、日常の吉凶を携帯電話で調べる台湾の若い人の価値観には少し驚いてしまった。

暦にしても古いにしても、人びとの行動を一定の規則にしたがわせるという点では、権威的な性格を帯びていると言わざるをえない。  
一方で、人びとの日常や世俗的な価値観に合わなくなった暦や占いは、時には修整され、時には他のものに置き換えられる。世界のあちらこちらに、土地にあわせた暦や占いが存在する所以がここにあるのだろう。



台湾でも暦や占いにまつわる多くのウェブサイトが開設されている

のばやし あつし  
野林厚志  
民博文化資源研究センター  
専攻は人類学。台湾の原住民族の人びとがおこなってきた狩猟行動を民族考古学的にアプロウチするなど、動物資源の利用に関わる研究をおこなっている。